里見八犬傳

第三輯

巻四

へ13
709
14

遠へ門
弟709
巻14

明治三六年十月九日購求

南總里見八犬傳第二輯巻之四

東都　曲亭主人編次

第廿七回　左毋二郎夜新人を畧奪ひ　寂寞道人見る圓塚に火定し

細乾左毋二郎はその夜さり。神宮の夜風に言されん詰旦より寒熱せ
ず。この日八ゑ習子を伐たゝ久しう夕飯もたゞぢうち臥さり。かゝる又その
次の日乃。午の貝吹く比及ぶ心地清くもくさりのふけ見ば。ぞり臥蓐を弄め
つゝ。ちゃうぢもや口を漱んとゝく外面に立出べ莊官屋敷のくるふ當りく物乃
響のゆのえさる年の終りの煤掃く如しいと不審くいろふよるん躰て門邊を
立てその見とく間近く出んとする程ゑと見れば一個の莊客。右ゑ一挿乃
鍬を携乃。左ゑに五六根の夏蘿蔔を引提く。草野のかゝとり来るありけり。

見則別人なるべき墓六ヶ老僕背ゆるゝ。こゝハ老ちゝを見入りて目礼をなして
け見ハ左母二郎ハ[illegible]くと[illegible]抗て[illegible]と先生ゆ[illegible]くいそ[illegible]れけのを主
用の虫拂狩常ふゝあぐ物ゝ[illegible]帚響の[illegible]ゝる彼ハいふと尋れハ背ゆハ
呼れく[illegible]ふゝ之より否虫乾ふゝ[illegible]ゝ今宵壻入のゆへハ天井ゝる蜘網と
掻拂ひ席薦の塵埃を打拂ゝ戸桟の修復障子の張更毛見の儲ゝいや
まゝく目つゝを廻むいそ[illegible]ゝ加以庖厨の混雑ゝ[illegible]ゝ腐せとの雑薪ハ膾の
料ゝ引ゆく来ゝ月来の懇切甲斐ゝ次ゝ来ませゝ[illegible]ゝ犬へ[illegible]左母二郎
驚ゝく。荘官の壻ゝゆハ彼犬塚信乃ゝ[illegible]ゝ彼人ハきゝゝの朝啓行ゝと
笑ゝゝ原来首途の日を延ゝく。俄頃ゝ[illegible]ゝ欲と問ゝ果ゝ違ゝ
違ゝ。信乃ゝゆハ昨日の暁方下総へゝて[illegible]ゝ今宵来ゝ壻殿ハ犬
塚ゆゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ左母二郎ハ忽地ゝ顔色変ゝく[illegible]ゝ何

人ゝ素ゝゝ約束ゝて欲ゝ言葉ゝ[illegible]ゝく問ゝ[illegible]ゝハ鑿を杖ゝく現
理ゝ。膳の潰ゝく話説ゝ僕ゝ定ゝ[illegible]ゝ孫ゝ壻殿ハ陣代の簸上ゝ[illegible]
ゝゝゝ又媒妁ハ属役ゝ軍木殿ゝ[illegible]ゝ聘礼物の件ゝゝの程ゝ贈ら
れゝ書院ゝ飾ゝゝ且密ゝの婚姻ゝ[illegible]ハ今宵亥の比及ゝ壻殿ゝ
ゝ来ゝく。新人御寮を伴ひゝと人の噂ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝハ犬塚
ゝ。底意地ゝ[illegible]ゝ伯母御夫婦の機嫌をゝゝハ九年要緊の時ゝハ追遣ゝ
ゝく。彼初物を他人の魍七十五日生延ゝ[illegible]ゝ果報のゝ[illegible]ゝ表液吸ふ
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ後ゝ[illegible]ゝ腹も立ゝ口舌も
[illegible]ゝ項の脂ゝ[illegible]ゝ著孫ハ當世ゝ[illegible]ゝ盃の長物ゝ[illegible]
時を移ゝく叱ゝ[illegible]晩ゝ来ゝ[illegible]と鑿柄を再び肩ふゝち撫ゝ背門をさ
てゝ走去ける。左母二郎ハ氣色ゝ胸を鎮めゝゝ[illegible]ゝ恋をゝゝ氣ハ

たまぬ細輪の田井に立よりて。汲揚る水も湯と沸ん心の鍼とゞめかねしを。手に摘
引提て。そが儘に肉に入る吸出る呼。憤激嗟嘆に堪ざれバ。何せんすべもなく
つくゞくと思ふ程に。濱路ハ信乃に稚きより。いひ名つけたるを妻と欲せバ。
渠に今妻せらるゝなれバ是非もなし。そはとまれ曩に亀篠が。これにいひつくろふも
あり。然るを何ぞや陣代の勢ひに附て約束を変改し。既に密事を委ねたる。
これぞ願ざりたらん。おのれハいぬる日亀篠が云云といひつるハ全く濱路と図に
まくて且に彼一刀を掠かへさせん為のことなりけり。この返報に今宵ホ聟の
簸上が来ることなれバ。その席上へ踏込て。蟇六夫婦が悪事を顕し。思ひのまゝに
恥ぢて欺くして。婚姻の妨せん。否め此してハこゝ迄も亦件の刀代掏かえたる支黨
の咎免ましかし。加旃信乃が刀ハ竊に藏めてゐるも自にあり。この事遂に露顕
せバ。いかでか罪重からし。この計策究て可らず。又唯刀のなき故隠して。母

親が許したる濱路なるを。然るも正しき證據絶てなし。よしや争ひ訟れ
ども。その訟を定めんに陣代なれバ。雖分ありとも述べかれバ。これ非理ありとも労
なく切るゝのみならず簸上ハ必これ忌ん。忌ハ必理を非に枉て獄舎にも
繋ぐべし。獄舎に入らバ責殺されん。この計策いよく拙し。彼老婆奴が心を
見越して。密事を委ん為のみ濱路を妻せんといへり。斯飽までに謙
されしハ何ぞ智の足らざるに似てはあれども。その夜さりこの刀の奇特を見られバ
直ハ融すまじ。蟇六ならバ刀を掏替られバ損ハなし。けふまで何ともいはざれバ
彼奴も八犬なれバ。刀を信乃が刃なりんと思ひて。十襲秘藏するにそこれのみ
快愉まじども。これも亦男子え月頃日頃ありひをかなへし。且偽りにもせよ
そが母親の云々とおきづいひし濱路を今更人に娶られて八里の批評も
面ぶせなるべし。この地に住ひかたし。縦令今宵宮六ホが来ぬとも窺ひ婚

姻の席の血を扶ぜく。あゞ親子壻さえ一座の奴原蠢めく直ち他郷へ走るべ。否これも拙策なるゝ彼奴ホハ多勢なり。志を沿遂ぜ〻こと捕らるゝあらば後悔其処なたちかゝ早りく危死古又殘せんより。竊に濱路を極獲ひく逐電するふまたとる。曩ホ濱路が強顔かりしふ信乃が眼前なるべきゝん今ハ信乃を遠離らるゝ。彼醜郎ホ妻ぞらる残敢へ〻ふ得心せぬもあり。伴ふくその故郷を去らぞ何でふ後ざるとあらんゆりるホ信乃ヨ操を竭しく。且残容は京まれ鎌倉なるとあられ遊女ヨ售さく金ホせんもいと易かり。又この一刀の奇持をありふヨ持氏朝臣の重器と分えし。村雨丸ホ極まろ。これを故主扇谷殿ヨ献らぞ。帰糸のよるがるべ〻と出処を問るゝとあらば獲影丸呼あり。又成氏朝臣ヨ進らせなば信乃がみるホ新らるべ。呼詮華洛へ携上るく室町將軍ホ軍ホ軟らぶ召せられんるヨ疑ひる。こは十金の計策只この一歳ホ尽めこゝり吁ありとこは問ひこは答へく濁江の底いとゝく尋思しゝ稍十二分ホ計ゆく心の中窮ヨ欲び独居のるみ〻あれば人ゝ方ホ調度ハるゝれと殘頃ヨ要用のるのあるく些の家具衣裳を沽却しくこれを路費とゝ。ゑのびくヨ集めあく。公ホ脚絆ヨ草鞋の外ヨ物るゝ行装ひハ整ふホ仰くまぐ足らぬ。この甲夜闇の進退ハ背門より入りく彼未通女を〻〻や幾引出べき。斯しく奪ひ去らぐ欲と尋思ヨ果しるつの日のあるぐ暮ぼやとゝ仰ぐ。天ヨ往方の定めるゝ浮る雲の不芸好悪伎倆ヨ暇るゝりけるとゝ。後ヨ濱路ハ既ヨ必死乃覚期を。亂色ヨハ顕さぐ假染るゝ病著と炎暑ホ〻〻素髪たのゝん後まぐく恥しき姿ぞハ〻〻と勉く髪を結くゆ。いるぐ臥房を出ざ且ゝ。二親ゝこの形勢ヨ今宵の婚姻推辞ハせぐ。とゝひけ且バ心故しん黄昏

時ハいとゞなし。いそがハしさに紛れて得がたきを。かくてその日ハ暮果て。初更過ぐれ
甲夜暗に濱路ハ臥房を脱出て。潛に納戸の縁頬傳ひに外面へハ出るに。背門にも
人の出入繁かりければ。何処を死処と思ひかねて土庫の間の籬笆に身を
よせつゝ遶り出れバ生憎に頼みがたき蜘網ハ女蘿を包む吉野紙對喪る
風情なりけり。さて納戸の背庭ゆく。頬うら假山あり。夏樹の繁枝も拂ハぬ
人のかよハぬ処なるに。法闇夜のくまなきなれバ。さて究竟の処ぞと死天の首途を
急ぐなるべし。されバ臥房を出るとき。燈火を暗くして。蝸の肉まで臥るが如く。枕に
小襖をうち被けり。さらぬ隙にと携たる用意の纎帯引伸して。簷牆の
ほとりなる松が枝に投かけて。そや經まんとする物から。心の闇に天の鳥夜
降る帯の端をとりも掻撈る手頭によるべなき己が身いとゞ悲歎に實
の親も同胞もありとハ知れど名をもしらず。まことの親ならぬ親達に。養育乃恩

年戦臯くおくらぬ不孝の罪をまぬかれぬよしハあらねども。二度踏ぬ女子の節
操教の丈に背んやさはまくも心つよきハ養親達誓を破る不義の富榮
利を樂ひあふとも。人の命ハ限りあり。惜むハ身後の名にあらずや。そハ恨む
ともあなよしの甲斐なきハ現女子なれ。さっと彼処を遠くもあらぬ道の
程とハ知れど。天を隔て飛鳥の翅なき身をいかにせんより。や倶寐させ給ひ
あれ下らひ親の許されし妹使の契あれ儻海ふかき數々に身を措くあてく。
今を限りの命ぞと思ハせ給ひてそ思ハれもせず。契ありなんかハいぬる夜ふかき
べきものなれある代は迚く別れし鶏の音を恨しより猶強顔きハ今撞初更
の鐘の声亥中の天をまたぐ逝く。ほしや真如の影頼む月夜烏こゝ啼るゝ
るん君が一宵の言の葉に露の命を惜むべき墓なくならん夢の迹傳へ
笑ふハ立ゝ。標へかえぬとの松を妻の標石と斉し君がいつか阿伽灌頂賻

樋の水の一霤受なバこれぞ不二說法。たとへ聖の讀經ふもまして成佛えつらん今般ふ物をおもハじと思へどもおのふ良人のある。親同胞のあるさへよ心ふかゝる歎きのかぎく潜ぶときれども忍びかねて。むせりごちたる竊音ふ。忍び涙の露深き袖をも濡らて夏草も秋の虫ふ声を戰ぐめるを。さる程ふ左母二郎ハ時刻を測つまて蟇六が背門より潜入らんとするふ彼これも挑灯引提て出る人あり。入る人あり。便なしと立退きつ。なほ外面を彼此と。窺くふうち遠つまく母屋の背後ふ立在つゝ。遠しあがむまハ築牆の朽たるあらん。そこぞ根良ふ犬の出入さるたるまゝある頽さへありしが是究竟と竊ふ欽び。やをら細溝を反越て。その頽よりぞ跋入るふ朽たる牆の癖なりしバ。ころぶ入る隨ふ費かりつ。樹の下ふ身を起して。手足の壤を掃落し。家内の様子を考るふ。いと暗けれバ其知よしも汐別かね。只左邊なる白壁のみ。烏夜ふもほのかよ見えしかバ原来さて八納戸

の背後なり。彼土庫の間を遠きバ。常ふ濱路がをるといふ小房へ遠からずとぞ思ひらの案内ハよくもしる孫ども。のぶよ難きよやハあると思ふなるまを心あくよ。樹枝を傳ひ樹下を潛まく稍假山のほとりまふ到れバ。前面よ女子の泣音をうち驚かく透し見やつひゐて窃く小濱路なり。天の與と欽びて伽あくまで近つきど。聊らを窃く名の声。原来濱路ハ今宵来る簸上宮六をいさく嫌ひく經きんとせるふやあらん渠が節操を竭さとめ信乃なるべき欽つきれなるべきは定るふ窃つきけれども大かたハ見きなるべし。それハ誰ふもあれ當よ落る真玉を碎んや。さふとく足を翻く擒捞よれバ折もよし。濱路ま守りなく松枝よ掛る帯の端よ携て又潸然とうち流さる涙の隙ふ念仏を十遍ばかり唱へ。經死んとせる程よ声をもかけず後方より抱禁めく引戻せバ吐嗟と叫ぶ口ふ手拭掩鷲きあふあ。左母なり左母え思ひかけるき

今宵の婚姻死んと思ひ決めぬれ。心操をまもり身にしまバいとも尊く忝し
親達のむざんなる品にさへ眼にもとめずして、いかでおん身を将て走らんと思ふ
誠の空しからぬにぞ合さするどもて、必死を救ふハ天縁ならん。歎くべしと
なかと慰めつゝ耳にもかけず身を捨てかへしまくに振放ち、噫無礼なる白徒
かゝる他夫に伴れてかへらんハあらぬせバいかにして臥房を出てかげろふの命をさへおとさんと
思ひしも、死を益のなき我をりんより、其処退かずや。と敦圍て復織帯にすがりて拭
るを遮禁めて冷笑ひ、然ぞてハなほ死なず。月ごろ日ごろ思ひを運バし、又
母親が云云と竊に許せしなれバ、簸上を嫌ふハこゝろ為に苦節を竭さんと
思ひしぬれども、且ハ還るやかへれども末なずつるなれ、信乃がるす思ひ絶ぎハその
身の破滅、否でも応でも携ていぬべし。生よとするを含れバ、又あり拂ふ玉柳
の風に斎るて翠の鬟共にたぬるぞ鬼蔦の黄縁る松を縋りて彼首へ

逃ぜ此首へ潜りし鳥夜に紛ばして躱さんと思ふのみなる。猟場の雉子雄にこゝろ
まぐ叢薩に声を揚ば宿捷するも、かくれぬ憚の内外に逼る呵責
の苦しさを追れて礫と泣沈めば、鈍しやと襟上を攫撮て引立て、拭衝
きる猿鎖小腋に捷と攙込ば、濱路ハかゝれど死病後の瘦宍未免に
捉られて夜の蟬声ばかりあくて泉れなり。左毋二郎ハ既に斯女子を小腋に
抱きてハ舊の窺より出ぬれど、抑何れより脱去らんと見かへる片頬に織
帶の障るを、左右に丁と搖り。是究竟とかくりて、丙りと登る老松の枝より
條ふ築墻を幸ひに、象喩がたちや外面へさし立て、蹲ぐが如くちも溝を
たぬか。音を絶つ蝦蟇の履一隻も失ハで藏て用意の行鞋足に信しらむ
去ぬかくし。程に庖廚に八弐の土器饗膳の調理庖丁整ひなり。當下臺六ハ
書院の床間に着花を立、懸幅を掛さして、あぢたゆふ初更の鐘の音をきゝつ時

剃近つれぬと云ふまで。亀篠を召くらの事。壻殿の来まるる小今一時が程ハ
あらじ。夏の夜の深さまれいつまぐらいで止べれ濱路よ云云と伝へ去らしく。
衣裳を著させまゐぞやと云バ亀篠點頭く。吾倚も如此思ひ侍りよろづ小
暇ありまーぶ。暮てハ臥房小立よりねども。湯漬を些ーたうべーと婢仁ハいひ
侍り。髪を結び揚るまバ衣かえさるハ易かるべ。あるいそぐやとのひろけく。
そぶ臥房へ起れ入。いく程もなく走まく事ありと呼立まバ墓六
驚れ見入りてさいま謀ーー何るの安らんと問せもあえず眼を睜り車あ車
あ。落つれまふ濱路ハ蟹を脱生く。何地ゆれん影もなぬ。剛へや登れ
と云バ浴室の四隅まぐ。隈なくあさり侍りしどそ彷バ逐電せーーうんと
告まバ墓六ありはさも含ふ花瓶をうち落し流る水を袴乃裾ぬく。
拭ひも果ぎ刀を起ー。そハもや大事小及びう。然るも驚ぐべらず。いで

いでといひうけく紙燭を乗く庭小出れバ亀篠も共侶小樹柱の隙を彼此と求め
るまく土庫の間を過まく奥まるくる背庭小来まく見まバさらよりまりと
ぶーくて纖帯弛松ま結降。足代ま也ーあやあらん牆を乗る足の泥処ま
印ふ。ーやと云ふ憑の綱のきまく漁邉ま漂ふ船の跡ま見ぶ如墓六ハ
顔色水より蒼ふ。忙然ふ形容小亀篠も亦嘆息ー。結髪ふる小
忻まく暮ても護ぶ。ーーバ綾子ハ亀の蛍を飛ーーふ。あの小濱路ハ豫て
ふ。いひあハせーるのあふく。信乃奴ぶ誘引出せーー形ふんとハ墓六流ーー信乃
あハ年来睦ーふぬ額藏ぶ従ふ。情由あまとくも輙く途より引
ふーく。何るのふせふるべ心憎れハ左毋二奴ふ。ふく来のへと先ふ。ふて舊
の如ま支入り心利ふ小斷を召く左毋二郎ハ宿呼ふありや。挑灯引提てふ。
見く来ふそげく。と焦燥べふけ。ふ。と心ふ思ふ。ふ飛ぶ。ふ支ふ。

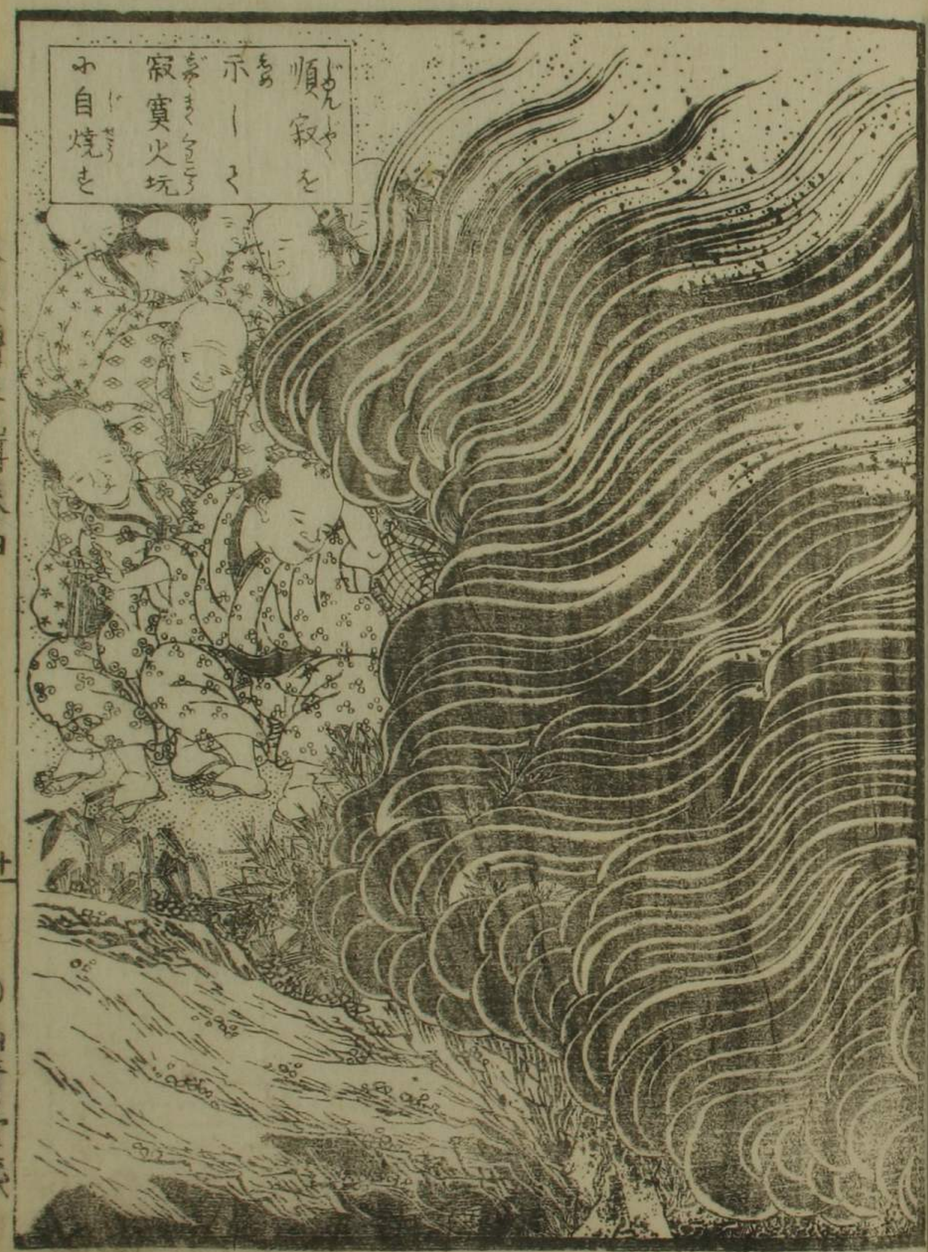
且〻く件の小厮ハ喘〻走かゝり。左毋二ぬの宿所へいゆれ〻く呼門ゐ応せどもかを推開て見ゆ〻ハぬ〻ハさらえ調度ゐ〻どぶ〻どもあゝぐ空工房ふ〻とゝ〻その為体をゆく推せバ逐電ゐつるふ疑ひなゝと告る式笑ていとゞゐつ〻夫婦ハ迭恨ふ堪ざゝく俄頃ゐ僕僮们を召聚云云のゐゝそあれその密夫を左毋二奴ゐつ遠くハ西ゐゝとおゞゐるふ疾追蒐く引搦来よゆゝ汝ふゞるふ乗ゐどゝも濱路をゐる捉逃ゝそ灯をめゝぶゐゐゝふ這奴ふゐゝれく捕ゐこけん人を追ふゐハ圍てそゐけゐ背ゐハ老ゐく足ゐゝくも今宵ゐゝつゝハ親式入ゐゐよ誰ふもあゐ功ゐよゐゝく賞銭ハ過分ゐとゝせんゞ誰と誰ゐ東のゐゝ彼と彼ゐ西のゐゝ必ぬるゐゝらゝくと両三人を一隊まて既ふ四支部ゐ瞬間ふ悉出ゝ遣てもゐかくゐ夫婦ゞ心体ゐハゞ亀篠ハ頭痛と病ゝてみゞゐゐ推磨む額を撫ゝまゐべゝゐ必ひもうけゞ曩ゐハ信乃を禁人ゐく

左毋二郎を引入ゐゐれさゞれ濱路ハ一下さゞまく外へゐゐ式程さゞゐ猜ゝ錯へく偷児の隙護ざゐゐゝハゐゐの怠ゐ悔ゝゐる式ゐく けゐゐと人をゐ分をゐ忍ゞゐハ墓六ゐ亦嗟嘆ゝく過ゐゐハ悔てゐかゐゞゐゞゐ當る今宵の婚姻ゐゐ聟入ゐ程ゐ形ゝその折濱路を狙ゐく来ゞハ何ゐゐいんと屈託の頭を俣ゐ病ゝゐ浩処ゐ土太郎ハ曩ゐ墓六ゐ相譚ゐ神宮河ゐく人ゐゐゞ信乃を亡ゐんとゐつゐゞその水煉ふ敵ゝくゐく謀合期ゐゞゐ労せゝのゐゐく功ゐゐれハ墓六ゐれを不足ゐく辛苦銭ゐゐくハ取ゐゞかゐく土太郎ハ昨夕の樗蒲ゐ幸あゐく鐵鈔一文ゐなゐまく ふ素より不敵の癖者ゐゐハ彼荘官を豪求く些の酒價を沽だゐとゐひく夕涼ゐけく訪ひ白ふ背門ゐゐゐ入ゐハ墓六ゐとく ゐゝく忽地ゐゐろふ欺び土太郎欺ゐゐ折ゐよくゐゐゐ来ゐゐと立迎れバ否さハゐくゐひゐぬる夜の辛苦銭相場外で直ゐ

あくまで切に此ハ増酒價をとらん代禁めく是ハさらく。そ我今更ゐいみるず欲又更めて汝を憑ん今宵ハ不慮の難美あるとその故ハ箇様こと辞せとしく說示し。こゝぶ女児をゐく走アり。密夫ハ汝も認まり。神宮河ゐく同船ゐる。紐乾左母二郎といふあ人園宅の老弱送ゐく。既ゐ追捕を蒐ゐとゞも彼ホのくでゐ心ゐく形し。今招ゐごゐく汝が如ゐ資を沒ゐとゐるゐき幸ひ。かゝてふこゞ運ゐ度憑りゐく追禁ゐく引搦ゐバ辛苦銭ハヨヌ少を論せど偏ホ憑む。と夫婦ゐく幷ぬだゐゐホ相譚へバ土太郎ゆゐくゐち点頭現今まゐへゐ来ゐ途ふく豫て相識る行轎夫加太郎井太郎ホが行客を乗せんくも足を論じく置くとそゐく舁も揚ざゐゐ。烏夜ゐ夜ゐ只井太郎ゐゐゐめいひゐく立休ゐく過ゐし。原来件の行客ハ左母二郎ゐ疑ひゐ。轎子ホ乗りふ娘ゐゐゐん途ハ正しく礫川本郷坂へ赴ゐん。いで追禁んと裙ゐり揚ゐ。

生んとも見バ墓六ゐ遠く呼ゐ。左母二郎ハ武士の浪人その本事測ゐゐゐ。素ゐゐく追ゐ徳あゐん。とゐりくゐゐ後ゐ徐ゐと挿晉乃一刀をとり出ゐ。遽ゐ食で胥ホ跨ゐ。ゐ見でゐいゐく心ゐり。翻ゐ換籠ゐ瞬間ゐ雄雄ゐ試ゐくかゐん酒暖めゐちゐゐゐある憑ゐ。ゐゐゐゐと急ぐ夫婦を見ゐかくゐゐ。ゐ後甲夜間ホ掐妻の減るが如く走去け。詰分両頭寂寞道人肩柳とゐふ怪有の行者ゐり。原是何四の人氏ゐゐを知ゐゐ去歳の夏ゐゐ陸奥出羽を券縁し今茲ハ下野及下総ゐ巡ゐ遂ゐ武蔵ゐ飛錫ゐく愚民ゐ尊信せられゐ。その修法ゐて嘗薪を積ゐく烈火を踏むホ自若ゐゐ。ゐ人の吉凶悔吝を占ひ又病厄を祈禱ゐるホ応験あゐゐゐ人年来吉野葛城三熊野八咫烏ゐ。駿河の不二肥後の阿蘇山薩摩の霧降下野の二荒山出羽の羽黒山ホゐど霊山名勝をゐく遍ゐゐく登陟し。神人異物ホ邂逅しく。

寂寞道人肩柳


順寂を
示しく
寂寞火坑
み自焼を

不老の郷を治めうと形ん現その為体烏髪長髯ふーく。壮年の人と異
なくど。さつまども百年前の事迹を問ふに応答眼前に見るがごく。説示ざる
ものなけれべ人衆敬信感服せり。又この肩柳ハ左の肩尖ふ一塊の瘤ありけり。
ことふよつてくその形體斜なつて人亦その形同ハ肩柳塔くこゞ一身まハ。
常に佛菩薩宿ふせるくり。左ハ色天行の順路。肩ハ肢體の無上所ようて。
東方天照皇太神西方釈迦牟尼佛。ちふ止宿ーさつーまるといくりかくく。
この夏月肩柳ハ豊嶋郡ふ鳴錫ーく愚民ホに示きかり。丈三尺ハ火宅ん
穢土に立く穢土を去らざる嗜慾に耽ア。嗜慾に思ひ愛多惜みよりく輪
廻あり。好悪ふよりく煩悩ヨヌかり。四大原是何処より来るに及べ悉皆空
なるに十悪何処にあるる剣ふ省ハ一妄想のこと。この故ふ諸佛悪趣ふ出現ーく。
濟度に暇なしとは凡夫ハ無邊無数に佛縁ありのハ無佛世界に生ーく。佛

性ありたりのこと畜生道中ふ墮縁度普かくぶるふ世尊涅槃の室ふ入りく。
寂滅為楽と教ゆ。現生あるものハ必死あり。形あるものハ滅ざるなーく。機圓
既に満るときシバ。太陽の没るかく積氷の消るかーく。誰ら一人のこでまるものあら
んや。かくべ一身を天堂に かくーく。彼岸の禅定門に入るこそよけれ。
よつてく来ぬる六月十九日申の下刻日没の時ふ丁てく。将に火定ふ入りんとす。
その地ハ豊嶋本郷のほとゞ圓塚山の麓なるべ。深信有縁の道俗ハ多のく
一東の柴を布施く。来會せよとぞ徇さりける。さるぬざる尊信なる里人ホハ
これを伐のく噴噴ー。昔より入定の行人あるとハ笑けど。皆生ゆぐら土中ふ入る
のこ。火定ハ最も有かさるべ。權者の入滅をあぐまぐハ何の時をか期ざ死
とく本日を俟ざるものもあー。かくく衆人ハ肩柳ぶ指揮ふ隨ひ六月望の比
より立て。圓塚山の麓なる茅萱を芟拂ひく一座の土壇を築立るふ黒木と

めぐく柱ととを壇下ゐハ廣く穴を穿ゐるその廣さ五六間深さ丈餘ゐも及ぶゐ。柴夥投入さるバ虫の毀ぐ所隙もなし。抑この圓塚山ハ豊嶋本郷の西ゐあり。巽を蒼海杳渺とゐく。安房上総の盡処をも視るべく西ハ連山嵯峨とゐく。笹根足柄富士の雪夏なほ寒さちぞすゐ。鎌倉海道ゐゑぐれども木曾路へかよふ駅路ゐゑく。上総下総へ赴くめ。ちを過ゐを捷徑とゐる道ゐ。

てゐや本日ゐもゐりしゐ叔寞道人肩柳ハ白布をめぐ頭を包ゐるゐ布の浄衣を被ゐ。壇の中央ゐる胡床ゐ尻とゐ。ゐゐハ一箇の金鈴戎振鳴ゐし胸ゐハ一面の明鏡を掛背ゐゐ一條の輪袈裟と垂ゐ。ゐぐと兜巾を載ゐるけりそのヰ打扮異様ゐゐ。現念の眼を閉ゐる甚麼ゐる経を讀ゐやあゐん朝より暮ゐまでその音声濁らぐ週ぐ。をゐく。ゐ人を視る眼光いと凄し。壇下ゐ彼此の老弱男女群叅囲繞しく蘿蔔山田の邉ゐぐ。人ゐゐぬ処ゐなきゐ。

頭の上を照しゐる夏の日ハ堪ゐてゐ。ゐ是ゐゐ火定ゐ入りゐれと罵ゐゐ。樹下を索ゐ娶ゐもヨかりけるかゐゐ。黄昏ちゐるゐ豫ゐ戎ゐゐゐ。件の柴ゐ火を放てバ煽ゐとして燃場ゐ。暑中の猛火ゐおそれ惑ゐゐ。壇のわゐゐゐゐあるゐハ散動ゐゐ退ゐ。當下肩柳ハ経ゐ巣ゐ平形金珠を鎗ゐ推揉ゐ。霎時念ゐ壇下を直下し。声高ゐ讀しゐ。昔如来の後父弟ゐる。阿難陀の摩揭陀國をゐち去ゐ。吠舎釐城ゐ赴ゐるゐやゐその王ゐゐ。德戎恋ゐゐ。迭代ゐ哀驩しその一王ハこれを追ゐ。南岸ゐ営軍しその一王ハこれを迎ゐ。北岸ゐ来候せり。阿難尊者二王の相争ゐ鬨戦殺害せんゐ戎ゐゐ且ゐまひ。船ゐり虚空ゐ昇ゐ。立地ゐ寂戎示しゐ身乃中ゐゐ火を出し。骸を焚ゐ中ゐ骨拆ゐ一ハ南岸ゐ墮しゐ。一ハ北岸ゐ墮しゐ。ゐの鬨諍を禁めゐゐ。ゐその功德廣大ゐり。この他の道德自燒しゐ或ハ二世ゐ

諸仏ハ献り或ハ衆生済度の方便載く聖經ヨ灼然と貪道辱く之宝ヨ事ヲ勤約ハ年を経ども自他の利益ヨ普くまど爰ハ愚癡の薄徳を省きハ速臭骸と解脱しく垢の浄土ハ到人と欲を冀ハ有縁の道俗身威不隨者の財宝を棄捐して未来永劫の善根を殖ヨ設夫一銭二銭を捨るめを一劫二尊の慈航ヨ乗くん三銭四銭然捨るめハ三蔵を自得しく四難もよくハ易るべし五銭六銭を捨るめハ方ハ五覚ハ感通しく六塵を掃除せん七銭八銭を捨るめハ七難ハ苦と出離しく頓生菩提乃機圓ハ求ん九銭十銭を捨るめハ九品の浄刹ハ托生しく十界能化の菩薩と為ん如是の善男女如是の財を捨ハ身ハ苦海ヨ在ヲと以ふとも則貧寂の同行ヲ。いふとなきハ五慾の財物を焼却ふてその才ハ代ヲ量の德本と播殖ふ。ゆて清果生れば勧化隨縁怠ハ平等利益疑ひ

しと説勧る声の中より。群集の老弱火坑を望く破落哩ここと擲ハ銭ハ落花の風ヨ隨ハ如く。雪吹の窓銭拂ハヨ仰く幾十百と数ふ銭をそのの銭既ヨ投ヲ已ハ肩柳自莽の引導しく声高ハ偈を説く云。

西方　莽釋尊一年　　撃然裳興石火　　東土　燒道昭時。
閃く　炬燄揚播。　言静相聯十眼　　看灰裡結清果。
唫誦まる工之遍ハく煽こる猛火の中へ身を跳らせく投入ヨ之火燄裳と立沖ヨ膏沸ル穴焦ヨ骨もとでめぎ倏忽ヨ灰燼とあり て失ハけり。これを見る衆人も感涙を禁めあぐ。同音ハ念佛しく且く鳴も止ざりけるヨかくこそや山寺の入相の鐘音ハ聞る。諸行無常の視念も僉今ハしのるハ思ばえておのが帰去人東西ヨ之ヨ已ヨ南北ヨ散らせく。迹ヨく燃る茶毘の坑許ヨ光ハ夏虫の火虫の外ハ物もなし。さハ絶ハ初夜過く。月ハ傾くヨ小挑灯

行轎の傍の窓よ結搦へ引添へ歩いそぐ〻まるめのあるを此ハ是別人なるを則
細乾左母二郎なり。嚮ふ濱路を豪奪へ途よ行轎を傭ひて。そぶ〻く間道を
乱走へ〻く。木曾路を京へ入へ人へ〻く。路さへ曲る由美村より。この圓塚を過るふるん
そ紙舁へ二人の轎夫ハ疲滅残る火定の火光をよるべよ間迫く扛さえて左母
二郎よりち對ひ親へ〻定めの継場へ足賜へ退りてん取へせの人と左右より。
そ生と堂を凡久へく冷笑ひ汝ホハいふふへく。喫せぬ酒よ醉へる中へん駒込
の建場をへち越へ。板橋まで〻と定めへるふ。まて継ぐといふよ〻あへんやいと肯
是ぬとあれども〻さへ〻を骨を惜むとあるふ汝ホを憑むまでけを轎をそんなと
扶生へ〻こを是へく中へ絡と懐中より。両緡の銭へり生へ〻遽ふをを受ぎ両
人齊一足踏鳴へ〻へくちち笑ひ絶よ二百三百の仂銭を取へんへく。夜行を
へるくまへハ来ぶいと艶妖なる臓物を縛かへげく猿鑣狂女なるぞ偽りて

暗めても挑灯の火光へ疾視へ眼ハ違へぞその両刀ハ人目へるへ。武士よ
打拗拐掣児巳へるふ好へるさへ〻へく。空棒振へく中へ選へ息杖一本。酒一
盃。建場へ〻歯の利へく板橋の橋を首へ〻へ板の井太郎その相肩の加太郎と
人ホ〻へ〻を一蜘蛛冥利掙ヲよ由新へつの夜の細よ掛へる玉虫をへぞふ
他よ落へぞ。そんなハ中へ〻へ。腰へる盤纏も衣へ〻を脱へ亡へる是と
訛声高へ左右へ〻を嘩ヲを〻を是ど些も騒へぞ。ほへぞんへ〻へ薮蚊仂耳邊よ
附へ物匂奪へ欲へハこの世の暇へ〻へいで取へせんと拔打よ晃ヲと被せ
刃の電光右邊よ立へ〻加太郎ハ肩を砍へを〻へく仰及へ〻へ透をあへせで井
太郎へ。打込む息杖受へ〻へく二三合戦ふ程よ加太郎も赤身を起へく。
左右より引夾へ野火を燭ホ追へ〻へく。迭よ叫ぶちへ〻へ声井太郎ホハ血氣ホ
乗へく。只管ホ競へども撃へ剣槍棒巻法へどハ一点へるをもへ〻へ動

山前乃黒
夜
四凶挑
戦き
さよ路
左母二郎
井太郎

土太郎
加太郎

走るハ駈悩されて殘ふ倭僧乱打に足場えらまず夏草を秋の紅葉と染なせり。さるハ亦左母二郎ハ武藝の達人ならざれども佩たる刃ハ名ある村雨の宝刀なれバ打振る毎に水氣さつと八方に散乱し茅萱に移て火ハ滅ぬ。荼毘の光も衰て足下暗くなるまゝに、鐵を断石を碎く刃の斧特揭鳥怯めバ憑入る後袈裟に加太郎ハ復肩を割れて鮮血に塗れつゝ仆れけり。そが隙に井太郎ハ躍れるのがれ後方より組むばかりと振放ち足を飛して撲地と蹴る。蹴られて撞と轉び起んとするを起しもたてず細頭丁と打落して血刀引提て吻く折、土太郎ハ稍追蒐来て滅残る火に透し見て、声をもかけず背より見かけて刃の光に左母二郎ハ眼さへくらむ、吐嗟となかり身を反れバ疊かけて撃大刀を拂退つ、信と睨へ賊ハ二人とぞいひしに原来汝も支黨の引剥にてそといふハせむかへバ刃と閃ことと倶に直しいぬる夜神宮

の漁舟で面を認りし痩浪人戸田河條で名の賣れたる土田の土太郎を忘れしか。吾を引剥と罵るハ家を抱て臭きをまもらざる汝ならん然ぞふに似たり。頭顱ある倫兒にあらずし論ハ益なし。荘官殿に頼れて夜ふかき贓物をとり復さん為に来つ。譜よりふ大蛇の道ハ蛇が識る夏山里甲夜に圖らず物いひかけしこの雲めホハ櫻蒲鞢計その折瞥とみかけし。なれも怪しき行客を乗せて間道を走ありしなるらんと思ひ憶へて圓塚の荼毘より先に露と消たる井加両太郎がなまし、仇人女の子を揚挈ひし大罪人ハ捕衆ある縲絏脱れぬ処と覚期しくみづから肘を背へ廻せ。然らずハまつ首級になして田畑の西風と欺くまそぞに荘官殿へ暴にせんさて走る欲争ふ欲と罵追る両竈前の二人にいやまぜどもさるもの大膽不敵の癖者刃を揚てよせ立ぞ。あな鳴呼がましき追捕呼り。擼械一本板三枚下ハ地獄乃境

思ひ波上ゑ八人をも罵らんいまさらこの本事を見ざるや女子をねらう夜行と侮アを引剥をせんと計較し二賊ハ既ゑかくの如し汝も冥土の伴侶ふ三途の川舟乗んとちゝぶ刃を受ゑと内めゝを失ゑ大刀風物ともせず死物狂ひ乃忘せ賣言息の根輟んと戮ひあゑ鍔音頻ゑ響く凄しく夜の夏山人絶く虫さへ声をとめゝる草を蹴ゑく奮戰突戰一上一下と敵を竭を。雌雄ハいまゞ判ざりけゝ。ゝゝハあ且どゑ左母二郎ハ再度の苦戰ゑ稍疲労れく既ゑ浅疵を負しゝ敵しゝくゝと忘ふふちゑん。ゝくゝふ一計を生しゝん刃を引く逃走れば土太郎のよく勝ゑ乗く蓬しかへせと追ふ程ゑ左母二郎ハ間を揣てゝくゑ小石を擲飼ゑ身を振てかくしく礫と撲ふ飛礫ハ寵を怨ざ。勢ひ猛ゝ土太郎ハ忽地額を撲破ゝまく。さと潰る鮮血と共ゑ。一声苦と叫び倒ざ。仰ざゑふ仆しゝゝ左母二郎ハ褶を突く如く走りかへ

つゝくゝそゞ胸前を蹂躙。又踏居く。刺を刀尖ハ名詮自性土ふ縫ゑし土太郎ハ。縛ゝゑ足を動ゝゝく身を大の字ふ。ゝゝぶまく息ハ絶くけり。抑土の土太郎。加太郎。井太郎ふゝ豊嶋の三太郎と呼ゝる水陸の悪根なり。年来ゝゝ人を害ひ又ゝゝ物狂掠く婬酒賭奕の場ゑ遊びトゝ囲法をゝそゝ。下ハ縣吏を賄と甘ゝ。銭ゝくゝ掛をけゝ移く。食ゝ飽ゝゝ銭ゝゝハ喪家の狗のゝく餓ゝ恥ゝ世ふ云兇ゝく忌憚ゝ天罰ふ疎ゝ又唯好悪邪婬の癖者細乾左母二郎ゑ殺ゝ毒を制ゝ天の配剤玄妙ゝ間詰休題。左母二郎ハ辛くしく。土太郎を擊果ゝ刃の鮮血を推拭ふゑ生血をゝ引くゝ白露ゑ濡ゝふ。ふゝふまゝくこの刀の幸特ゑ感嘆浅ゝ。郷ゝゝ生死存亡の際ふ立く心えつゝ。現ゑゝ衣の濕りしを野火の滅しふ村雨の

刃より成を留まり紀再び「こつる刀の威徳ハ仕宮の採黍一。とうち戴ちく
鞘ハ納め。三尺帯を引列衣く。脱の浅痍を括留滅果んとせ一坑乃史ま。
残る柴を投入るをハ又烈こと燃上アるく。風のまゆく彼此ゆ。茅萱ハ移れバ
いでーく。白昼の如く明るまけ。かくく左二郎ハ轎の内ハ伏沈む濱路を安をる
抜出ーく。その縛を釋捨をハ。又潛然と泛沈む。傍乃株ま尻城かけ。やよ
濱路。そもかくても腐縁泣とく後へ。やハかくを命を的の由美村より。と乃
山越ま二人の大敵。かう多く蹴せーを。ハ誰ゆるとゆひのハ皆見ん身ゆ
さや。畢竟浅痍を負ふるのゆく恙ゆけをこれ死ぬばん
身も亦。ハーゆまくく幸苦受人かくまでそふこれをなぞ強顔ハめてゆーゆ。
さバちん身ゆ心ゆハ。親壁の密議を告んゆる夜神宮河の漁猟を。竊ま
信乃を害せんくく後引出ーゆあるべ。かくハ暮六荘官ゆ。不覚ま水ハ落

ゆも。実ハ信乃を誰引入るく。水中ハ殺さんゆの。然とも信乃ハ水煉をよく
るゆハやりつくん。土太郎さ人ま敵ーゆぞ。荘官ハ阿容ゆと渠ま抱き
縮めるを。前面の岸ま登さをれバ。その謀成らざるゆくん。その前の日ハん
身の母れゆ。竊ま吾倩の宿所を訪ゆく。信乃を許我へ起行る。意中の
機密を物ゆ。初里人ハま媒妁せられて。信乃ま濱路を妻せんとのひゆつけ
るとゆハ荘官殿ゆ秘蔵の一刀をを撃牽出ハ取らせをる。今ハく明く地ま。
返せとゆ必推辞んよく如此をま謀べ。その折ゆん身ハ船中ゆく。信乃ゆ件の
一刀を荘官殿の刀ゆく揭晋ゆくべ孤う。彼一刀ゆハ畧代をゆ。其紀ゆく
信乃ハ恙ゆくとゆ。這奴許我へ赴れく。何度をゆをのごをべ。亀忽の罪を糺
さをく。縛首刎らをるん相謀をくゆハ濱路を妻せく職
禄副ま譲らん。とゆくハ推辞をくて。遂ま密議ま衆合船件の刀を揭晋

一中。あん角を妻ゐせんゐるのそそのるゐくハらゐゐく。さ序奸曲ゐ與ゑべきかゐく
ゑゑゑ。此彼両刀と揭晉んとせゐゑゑ。信乃ゞ刀の中心よるゑ。忽然とゐく水氣雷電。
夏ゐな寒ゑ焼刃の靈光ゐゐ得ゐゐゑ宝ゐ愛てつゐく視つ。熟思べ前の
曾領。持氏朝臣の重宝ゐ村雨とゐ宝刀あり。その刃。鞘を出ゑべ。おのゐゐゐゐ
水氣雷る。殺氣を含ゐゐく打振ゑべ。刀尖よるゑ生る水挾霧乃ゐく散乱
。ゐと伝ゐゐ你ハゑゐるべ。さゐ式墓六荘官ゞ。信乃ゐゐとゑ式與ゑとゐふゐゐハ
甚不審ゑ。信乃ゞ親番作ハその父面作共侶ゐ春王安王ゐ俱ゑゑゐ。結
城ゐ篭城せゑとゐべ。この刀を持氏ゐゐ。両公達ゐ伝ゐゐゑゑを春王安王卒
去の後。番作鞘ゐ携ゐく。大塚ゐ退隠ゑ。彼人後ゑゐゐゐ今ハゑゑを信乃ゞ佩
るゐ疑ひゐゑ。かくハ得ゐゐゑ名刀を。荘官づれゞゐゐ落さべ。俗ゐゐゐ猫ゐ黄金
ゐゐん且彼夫婦ゞ欲ゐゐ所。ゐゑ式愛ゑゑとこの刀を揭晉させんとゆハゐゐど。

この刀を畧せんゐゐゐ式愛ゐゐかゐゐゐる欲并言も遷ゐかゐ。さハ鄙言ゐ。
毒を食ゐべ。ゐゐ餅を。とゐゐく今霄のゐゐゐそゐゐけゑハ信乃ゞ刀をゐゐ
刀室ゐ納晉ゐ。ゐゐゐ刀ハ荘官の刀室ゐ納めゐユ合ゐく刃ゐゐゐ式三方晉ゐ。
かゐゐく且ゐのゐゐをゐゐゐ荘官夫婦ハ約束の脣もゐゐ乾ぬ程ゐ陣代簸上
宮六ゐ。婚縁を結びゐ。いく日ゐあゐく今霄の壻入伝ゐてゐ腹ゐゐゐく妬く
悔ゑゑ。形ゐ人を殺ゑゐゐゐ亦死人とゐひ決めゑゐゐゐゐん角の心式
ゐゐゐど命ゐ換るゐくゐれバ。ゐゐゐゐん角をゐく走ゐ憎ゑゐゐゐ人ゐゐ
恨をゐゐゐ怨式復を。志ハ致ゑゐゐ。幼稚馴染ゐ覊さゐゐく。信乃ゐ実情を
盡ゐゐゐ流ゐ隨ゐ落花の如ゑ。渠ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ。
再び試せゑ宝刀の奇特土太郎ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ。
生る水氣ゐゐ見ゐ。華洛ゐ上ゐゐゐゐゐこの宝刀を室町殿ゐ献べ数百貫の主と

なる立身疑ひなし。われハおん身をも奥さまと唱させ、よその人に册かしづかせん。甘んずるをそのめぐこの山をうちくら踰ぬかげや。貞れなば欲身を掠んか。いかにぞや。と身をよせて。背を拊つゝ、辞巧に慰めけり。

第廿八回　仇を罵て濱路節に死す　族を認て忠與故を譚る

濱路ハ淚禁あへず。よべ養親の奸曲と網乾が邪智を、はやく聞にぞ初めの恨いやまして、胸潰まどろ有為轉變、假染ならぬ遠離る。きのふけふなる旅衣、良人の難義を想像る。わが玉の緒の絶なば絶よ。いかで宝刀をとり復して、夢になりともこれらのよしを告て、丈夫に遞与んとおもへバこそ將しく。物なくに淚をおさふ。嚮には理なく縛られ、猶よく支られし辱めに恨めしとのミ思ひしが。思へば人にわかれて、倖ても過世より、脆き契あるなるべし。犬塚ぬしの大刀のみは、ありしも耳熟目熟て待り。彼人慎ありけるに、よしや火急の折なりとも謀らるべくハあらじ。そを輙くも掠替しと宣ふ言葉偽りなく、そらごと進退究り侍り。初は情あくあやぶとむふとも、宝刀を掠めし人としもなりつ、倶に走らるならんと二親にさへ疑れん。かれバかへる家もなし。況てその性いと正しき犬塚ぬしに容られんや。まづその刀を見せまいらせてとのかれてはやくちから点頭なば死ぬへ理あり。信乃は心に由断せじとも、伯母夫を赦人とて續て入水あらぬ折、船にあらしは吾儕一人、その刀をのみ掏かえしはり。渠に危事なりし時、この村雨ハ立身の撰になるのみならず、妹妓の契を固くなる月下翁にもあまことわが僞らざる證なり。抜バ忽地水氣あり。是この刀の奇特なり。撿て疑ひを釋給へと諭して、やがて引援遞与を刀を右手に受とり、ちかく見るものハ、丈夫の仇人と呼かくる。声あるとも

突閃くと刀の光りに驚き瞻く左に外し右へ避沈く拂へば跳越軽んとすれば。
かん潛ぎ後に立ち追詰る。かよわき腕も烈女の念力。悔ゆかくれ刀尖に左母
二郎ハやあとく怒く小刀引拔き丁くと受ながつけ入りく侯路に乳
下礫と砕る。砕らるて苦と魂消る一声怯む刃を踏落し跳蒐く掩へむ頭
髻を膝に引著く。霎時疾視く。声ある立牝狗奴今さらどこへ
情欲ゆるべ心のどけく慰めもしん賺しもゆくるさる式執念深刃物
三昧仇人と呼ぶくるるまでに信乃を忘れくへ暇をこそせん。
彼世ぞ合へめ。ぶてろに後ぞ遊女に售るとも身價あり。化骨折ら
じとゆ已に紙幣を賣物に傷けくるべそれも詮なし。飽まぐるときみ
ちかりし報ひハ覿面早くハ殺さぞ。どひのまゆに苦ませる。ぶり殺しに
旅宿の後然慰さけく熟鴆を冷人この世の名残もぞ捉ぞ泣くハ

ちけ。のひさくいい人ゆくべ月の出ぬまぐ聽鳳せんと引立く。同道に突輾し村雨の
大刀掻取く。鞘に納めく腰に帶。小刀を大地に衝立てほくるもの採に尻くち
掛懷中ある畳紙より。銀子を拂う出しく頤ぶくく掻消く。些の髭拔てをり。
ぶ。濱路ハ既に癸所の深痍に絶ぬんとする玉の緒も。良人に引立く
ぶ。起直ぶども乱髮額にかるを振拂ひ恨しげる左母二郎ぬ。ある
女子とぶりぶ狂ぶく伴ふのくぶよくぬ吏をぶろ沼貝に。ぶ養
親に相譚に。宝刀を掠めく。ぶ良人を。死地に陷せし邪智奸悪いぶく一
大刀怨んく忻ぶれども本意を沼遂ぞ邪慳の刃に現身の命を隕ぶくハが
ぶに月日ハ照らし。ぶぶぶ。こに拔退世の悪報欺さぶ。ぶぶも心ぶくの死ハこぶ
良人の往方に今一ぶびのあんよりも亡らん後に。ぶぶぶかく。ぶぶと誰に
告ん脱ぶ世の中やぶぶぶ。ぶぶ雅に時に二親に許されぶ妹と

使ハ只名のみ〻〻僑臥せど実の親も胞兄弟も煉馬殿の御内にあるとて。
反て世のくの人名を忘れど顔も認めず年ゝ恋しとぞ思ふ。ありひきや。
去歳ハ煉馬家亡びそのの老黨も若黨も皆殺されきと世上の風聞。よふ憂ふるの
数ならで刃の痩月ゆゑ三重の帯環りもあはぬ。圓塚の野火もろ共に滅でやく
眞土のかあり独行かうあるものも二親の非美非道といふのうち汝が悪ア
資に成るの世をかのうちも竭ぬ然ハ後竟にその身ふ報ざるべき狡
人ふ恨みの刃の落命も縁の起ハ外ならず。歎ずを入り見ぬまでふ情ちのきハ
養親達恋しきハ犬塚ぬ。ゆふ魂ハこの山の裾野の沼の水鳥となりたく許
我へ東の間よいのちなく良人に告まほし。よふ惜みぬ命尚惜むハ恩愛邪
義の為再び夫にあふ日なく実の親の存亡をもよ〻あらんその日まぐ。
有繋に惜き命ぞ〻あ甲夜ありふとの山を喻へ来ぬる人あれや助ける

神もあれ世狭と恨み泣くもあまりく かれ口説く。言葉の露を
結びあへず脆ハ女子あるなり左母二郎ハ欠伸しく。鎖子に著くる髯推
拭ひ。なるたなぐくしれ諍言ふ。謂を笑けば有ぐくれ親のあるふを孝女でも
信乃が為ふハ貞女でも。ふるまふもあるまで命を惜むも夫のあるを
以ばなよく助けぐ。寔に孟盆の殺生も皆己が心ゆ。脆くこれ人くも。
はなれハ命根ふ〻と炎所の深痍ふく。長物語ハ感心〻〻褒美ふハ只一
ありよこの世の暇を取らせんぞいでく。といひけく。食ふ鎖子を遽く懐へ
夾めく。地上に樹る小刀を抜く。内りと見せく。直ち血塗序にこの刃で。
と云ひけれど等一等飽まぐ濱路が念成被る村雨ふく引導せん豈
欲しくぞと。あざ〻笑く小刀を拭ひ鞘に納めく腰に帯又村雨の刀を引
提く親念せよと立かくれば濱路ハ駭ぐど頭を擡維仇人のふふ死を亢丈夫の

刃ゐかゝるハ本望なり。殺せ左母二郎汝も亦遠からぬ。最期ハかくの如くちゝんと
いひせも果ぬ眼を瞪ゝ。憎ゝ女が雑言なる息の根輟んと引著て胸前刺ん
と見うとす刃の光ハ先ぶるく火定の坑の邊よりも。誰ゝ知らぬ打出ぶ煉
の銃銃衝ぶ。左母二郎が左の乳下裏かくまぞゐ打込り。衆所の痛ゐ
雲時も堪ぬ大刀ふり落ゝく苦と叫ぶ声ゆゑ共ハ仰反り。時ハ又怪む
べ。坑のほとりゐ忽然と立顕るゝのあるけり。是則別人ならぬ火定ゐ終ぬ
示ゝる。寂寞道人肩柳なり。初ハ異なるそぶ形容亦是甚麽なる打拾ぬ
但見膚ハ鮫舌南蛮鐵鎗の纏身腰甲を透間もなく領見ゝく細ゐ蟄
ゝる蜘蛛ゐ似ゝり。往ハ唐織なる。段絞筋の廣袖の単衣を裾短ハ被
なる。秋菓を流を花泉の如ゝ腰ハ朱鞘の大刀を跨足ハ秩菓の
厚鞋を穿大平金の細密針ハ十王頭の臑脛ゝく濃紫なる圓括乃

帯鬢高ハ結ゝり。齢ハ尚青年二十左右ゐもやなゝんぞゝん眉秀眼清く。
色素ゝく唇朱く耳厚ゝく歯細ゐ月額の迹長く生ゝる髪烏ゝく。
髯蓍かり。その志望善乎悪乎その行法正乎邪乎いまぞ分解せざれ
ど。一ト癖あるべ見面魂。凡庸なるゝぞと見えくけり。當下寂寞肩柳ハ左邊
右邊を見ハ徐ゐ歩ゝよる程ハ左母二郎ハ呼吸環會ゝく。敵迫つゝぬ。
と見てくけまべ立ゝる銃銃引抜捨刀を杖ハ身を起ゝく躍るぐゝ駭んと
進むをゝちゝんさるのゝ些も驚ぐを。彼此雲時遣違ゝて駈悩ゝ衝と入りく。
矢庭ハ刀を奪取り身を躱ゝく。礫と砕る拳の勢ハ左母二郎ハ筋斗を
撲く倒れ多り。肩柳ハ見ゐ目をうけど頻ハ水氣立沖る刀の鞘を推立く。
刀尖より鍔下まぐく瞬も甚だ佶と見ゝく。現音ゐ似く村雨乃宝剣拔ハ玉散る
露欽雷欽奇ハ姫ハ焼刃の盡処天ハ虹蜺の引く如く地ハ清泉の流ゐ

似たり豊城三尺の氷呉宮一函の霜寔に世に稀なるべし神龍と見がゐる雲に吟じ鬼魅こゝの故に夜哭んか今宵こゝに来りこの名刀を見入るに復讐の素懐を遂べき時到る歟奇し奇し左なり殺し右なるかしてまた又さらぬ人ども飽き嘆賞の外に餘念はなかりけり業下某生再説額義八この朝信乃は別れ遠くなるまで後へのこ心引き歩果敢どるもの盛暑の時なれば樹蔭求く彼此に休ひ又走るに千住河を渡る比日暮果て途いと暗し迷ふべき程なれば村乃ところ人家に立寄るとも途に損あり卒郷坂を横きりて磯川よりこそとおもふに身に假傷造りんもとなくに迂路して月の出るをまちそよれと壯襄ふ事思ふ初更過る比及に圓塚山を越るに夫定めしとも途に笑ひ禁毘ハいまぞ滅ぎしかの遺明かりけるかと見れば鮮血に塗れつゝ什器なる男女あり又白刃をひかふ食る一個の癖者立在り

やうこそ来りめと端なく進よるに松の樹蔭に躲ひくその為体を窺ひけるに程に肩柳ハ難なく場に刃を納めよりり臥る濱路がほとりにつゐて安き引起し遽しく懐中より薬をとり出くロに銜ませ女子と覚結る声も薬もきゝ見るやいなや見れば怪しき少抱に向ち驚き只管に放さんと両掻にも肩柳ハ放さんを放めどいまぞ縁故を告ぜ姓名を告ざれば仇狄賊歟と疑ひく驚かせんあるべきもさらん深殘なれば各所にあらぬ心を鎮るを安く今般の志願を遂よといられく息を吻つきさいふあん男ハ何人ぞと問つ顔をうち目戍れば我もうち見て嘆息し名告れば憚あれ夜の鷲山外に人なしさるに圖らぬ環會しかれば則そのこの為に異母の兄犬山道松忠與と呼しの故あり去歳の秋より安を変名を更め寂寞院

五田二郎
道松忠興

名刀美女の存亡
忠義節操乃環會
頼貞
とし子

肩柳と世ふ唱まる假修験ゆく所ゑく火定を示し愚民の銭を促をる軍用の為ゑく君父の讐を報ふあり抑ゑぶ主君煉馬平左衛門尉倍盛朝臣豊嶋平塚の一族共侶池袋ゑく駄きまひゑぶ父大山負與入道道兼大人自餘の老黨負を竭ゑく冥土のあん供ゑくけまふ煉馬の館も焼撃せられく生残るゆ絶ゑくゆ。これ亦命を惜むよあゑねど組ぐ死をづれ敵ふ逢ねば不思議ゑ戦場を殺奔て遂ゑ復讐の大義を企家ゑ傳る間諜の秘術隠形五遁の第二法火遁の術を行ひく修験者ふ容を変或ゑれへ烈火と踏ゑく愚民ふ信を起させ又或ゑれへ火定ゑ終を示ゑつ。銭を召び財帑聚めて軍用ふ充んとゑるふ火ゑ投ると云はゑ、火ふ投らぐ全身焼亡ゑうとゑりふせゑく火の外ゑ姿を隠ゑとこれを名づけく火遁とゆ大約隠形ふ五法ある第一を木遁とゆ樹ゑ倚ゑれへ形を隠ゑく敢亦顕さぐ第二を火遁とゆ火ゑ遇ふゑれへ形を隠ゑく。よく人ゑゑるゑ第三を土遁とゆ此ゑ是その足地を踏ゑさゆ人ゑ形を見まるとあり。壁ふ没り穴ゑ隠ゑく皆是土遁の一術ゑ第四を金遁とゆふこへ金銀銅鐵をゆくゑ。その形を隠をゆ第五を水遁とゆ。こへ久ゑく水ゑ没ゑく苦まぐ又唯一杓の水を汲くもよくその形を隠をゆ。これを隠形五遁とゆ原是張道陵が道術ゑ唐山ゑへ漢末より今明朝ゑもこの術をよくゑるゆありとゆ我朝ゑへ六條院の仁安年間伊豆の修禅寺ふ唐僧あまこを独木遁の術を得ゑり後ゑ竊ふ兵衛佐頼朝ゑ伝へゑり。石橋山の敗軍ゑ頼朝伏木の虚ゑ隠まく虎口を遁れゑれへとゆ。その実へ木遁の術を知ゑるべ。又吉岡紀一法眼へ火遁の術を汲ゑるゆゑ。ゑれを人ゑ授けを源牛若丸。その秘書を竊閲ゑ亦火遁の術を汲ゑり。文治ふ高館落城の日義経既ゑ戦労を城ゑ火を放自焼ゑく塞外ゑ逃

きまで火遁の術より見るものうんこの後又さ術を伝授せしめ而して
ゆくえ独り家祖先より火遁の一書を相伝せり。されば其書奇字隠語
多く晦渋の絶えたり。吾倍年十五のとき先ずかくその書を披閲しつゝ聊明
るをあり見より夜と日とをかく讀誦工夫すること三ケ年遂にその奥
旨を悟るもそのこゝろとその法術左道なりと幻術に相近し勇士の行ふべき
あらねば父も告げず人にも授けず試るとなりしかも今や君父の讐敵管領扇谷
定正ホを撃んとなりかゝる一人の資なし一人の力なし金銭にまどはなし
と尋思に墓なき火遁の術をもて火行火定と偽りつ愚民を欺き彼此あるく
些の銭を獲るとなれば其地を立去りつゝ今茲は下野下総より武蔵の豊
嶋を巡縁しかるに火定の詐欺ありて絶えに銭を召さるゝものつゝかくの人に欲する
所忠孝に似て実は賊なり緞鞍の資を泛くに大敵をうち滅さんとかゝる不良

の夏をしかく人を欺き物を掠めるかくホ汚名を遺さんいと悔しくも正なれるに
志成費せしは嗚呼又なりと慚愧に堪ずして遠く隠家ホ退くに假髯とかるとり捨
旧の姿に更めつゝ其定正を狙撃んとせひ決めて再び踰る圓塚山に
旅人の聞評にしかく解きて雄を窺ふにその一隊三人の悪棍はいかに
なり残るは一人歌舞の癖者いと艶妖なる女子を拐掣てかくなりて逼る色情利
慾に後ざれば怒に乗じて遂に女子に対を貢せん。さてホ子ども此彼の怒罵
哀傷を霸ゆくホ女子は大塚の村長蟇六が養女と濱路とかはは今の名なり。
これに異母の女弟あり乳母を正月といふ。彼は二才。これは六才のこゝろなべ云云の
故ありて豊嶋郡大塚なる村長蟇六とかはホ生涯不通の約束なるが
養女ホ遣しかくと父の告さるをひしはとまるべしとせひしかくその危窮をまるに忍
びを銃鋭を打ちけく女弟が仇を撃とめくり。ゆくホそのくは幼稚より結髪の夫

ありてそぶるふ苦節を成すべく命を惜ぎ仇を罵り又実の親同胞をふく慕の心操負みて又孝あり。されども本意を遂ぎるを亦彼処よりあるとみがら救ふとの遅しく事のさまみ及べがたき天鑒地知の疎みしく善悪を差別み似されど亦是輪廻の致をとろ狡脱をくる因果あらん言長くも苦痛をたのびく迷ひを散しめんうしてあるさの母ハ黒白と呼ばるく。されば父の妾あり死るぶ母を阿是非とのり亦是父の側室なれども男子を産る徳よ依く嬉妻みせるを

こゝにまたぶ父道策大人の内室早世をされども又後妻を娶るのぶ子孫の為よ側室を畜く一両年を過しめよ是さ学むべくもあらねば又一妾を畜あひ死初の側室ハ黒白みるく後よ来るへ阿是非とそのとき父戯れよ両妾よ宜く汝ホ両人雑みもあを男児を産るあの紙後妻よせんと約しるひ。かくて阿是非ハ有身く長禄三年九月戊戌の日ホ男児を産てり。

出生の子ハ則ちられ生るぶるみしく左の肩尖よ大死ゆるる瘤あり。その形松の瘻よ似さをばとく道松とぞ呼れる十五歳の春元服しく名を忠與と命せるる父の欲び推て知るべしさをば約束ありけるば母をめて正妻ホ推るぶしるふよるん黒白ハ妬怨そるく氣をみふあるさを寛正三年の春渠ハ女の子を産くけり臨月早春ありけるをば女の子を正月と名つけるる正月ハ妹そのこのるえさ程ホ黒白ハられるを後よ来る阿是非ふたゝ男児を産るられハ後れく女の子を産くを六日の菖蒲十日の菊そをホもやうくあるふかひのしるふまのまとゆゝと堪ぎやあるをけん寛正四年の春のもるるぶ父ハ主君煉馬殿の使者らぶ京都将軍家へ祉候の折ゝ黒白ハ今坂鍼庵とふ醫師を霸よ相譚てらぶ母を毒殺しく吾倩を縊殺しん。時疫まく母も子も暴ホ死まるをぬと偽りく菩提寺へ葬けり。その月の下院ぶ父京都の官務とりく下向の旅宿ホ凶夢

家カリ。こゝより日毎に留うち騒げば。こゝろいよ〳〵安からず。夜ゝ日に継て煉馬に
皈著し。様子を問へば妻子の頓滅。葬ることゝ廿日あまり。一両日と経ずして。驚死
憂哀ことゝ。次の日寺へ詣て墓所に香華を供ずるに。殯下に當りて。小
児の啼声しきりければ更に驚死怪しく。住持に告て人を聚へ發せしむるに。
吾倩は則甦生して。啼てまどろく。甚し躰。扶出して。こゝ戎「人」のふゝ異なること
なし。只肩のあたり瘤の上に。いと黒きあざ。疵さへ生て。形牡丹の花に似たり。噫痛
哉死はこれ母の全體既に腐爛しぬ。いふもあさましければ舊のごとく埋葬
父は吾倩を携へ帰りて。主君に仕へあげ。俄頃に奴婢ホを召よせて。
の趣を告ぶ。この年吾倩は六歳。奴婢ホを聚會して。折に対ひて箇
様箇様如此ことのゆゑ。母は非命に世を去ぬ。吾倩も合葬せられ
仇は則黒白。戎資は癖者。錠庵と告しが父は再び驚死怒て。即

座に黒白を縛めて。ひたすら鞫問ふに。黒白陳じかねけれども。物ぐ憑て
いなせん小児の。告訴明白。竟に脱れ難き路のあれば。黒白は罪に伏しぬ。
これにより主君に訴て。父は更に主君に訴て。某甲某こゝに。錠庵を搦
捕へ。責問ふに。首伏の趣も黒白と異なることなければ。此彼齊一法のまゝ
斬罪梟首せられぬ。正月は二歳の。父の怒に。おさまらざれども。
女の子なれども。その母大逆無道に絶て。子と云べき生涯不通の誓をなす。
さるべき死の日取せんとて。その人を求ふに外聞を憚て。世に忌とのみ四十二の
二才児とのみ。養育の料として。永樂銭七貫文を齎して。大塚の村長墓六
いとあはれ養ひ取せもふとなん。こは己が年十二の春。母の七回忌の折。
父の告させ給ひ。現に絶て六才の。黒白が悪事を告しを一点だに
是をあがえぎ。さくみたゞめて。母の横死も。そのさのみも巨細ふに。懐舊乃涙

禁ゐ移さくうくと想像まへ正月もおなじく父の子なまた母と母しふ怨敵ゑ親の
棄さセもひ一女弟を「ヨヨ」豈「ヨヨ」久ろよりあるんやと心ゑ占くこの後ハ父ゑ向ハざ。
ち父も亦再びいひ出ゆゑ〻ば忘ゑ〻如く年を歴ゑ。ちゆひろけゐ兄今霄の再會且
躲ひゑく竊聞べその心ざゐ実母ゑ似ざ。貞實ゑ〻く孝順ゑ然ゐ共薄命かく
の如く邪慳の養父母ゑハ事ゑ〻ども。ゐゆふ郎ゑあゆと叶ハど無慙の癖者逼
迫ゑ。こゑゑ為ゐ害せゐる輪廻ゑよゐく鮮ゑ兄ハ実母黒白ゑ悪逆の餘殃と
しゑいふ兄欺ゐゑ〻ども父の子ゑ豪奪せゐ〻ゑく身を汚さゑ死ゑ至るまて
操をゐゐ〻ざ。今般ゑも親を忘ゑ。その自ゑ貞その孝空ゐ〻で不憶兄ゑ環會郎
坐ゑ仇を殺ゑゑ及びくその撃ゑとゐ此彼笞ゑく。痍ハ左の乳の下ゑ善ゑ必
善報あり。悪ゑ必悪報あり。今生の薄命ハ実母の故ゑかくの如兄欺来世ハその
身の功德ゑよゐく。佛果を得んと疑ひゐ。その孝心を告ゐゑ由ゐ兄父ハ煉馬
家第一の老臣ゑり。後妻の横死ゑよゐ〻くゐぶ德薄ゑと慚愧ゑ遂ゑ主君ゑ
ゆえあげく。祝髪入道ゐ久ゑ家老職ハ舊の如ゑかくゐ去年池袋ゑ戦ひゑ。
比類ゐ兄働兄ゑく。管領定正ゑ家臣鬼門三宝平ゑ撃ゑれゐひ兄亨年六十二
歳ゑゐれ復讐の志願成ゐ兄ハ亦復讐ゑゑ。ゐ〻ゑ死ん苟且ゐ〻ゐ修行者ゑ姿を
かえ一因あれば又世を去ゑ烏髪の入道父ゑ法名を象りて犬山道節忠
與と名告ゐ〻。かれば撃ゑとゐ撃ゐゐくとゐ。存命べくゐあゐぬ身の後れ先ゐ冥
土の伴侶父尊灵ゑ勸解奉りて身後ゑハ親子の對面させん。それを今般の
兄ひでゑせよ女弟ゐと叮嚀ゑ説示ゑ。ゑ又勸ゐゑ員ゑ熟ゐる勇士の如
抱猛くゐえてゐ骨肉の誠ハさくゑ顕ゐ。現一回の長物語ゑ十九日乃
月出て野火ゑ代ゐく明く光る。夜中ハ亦深そめて子の時近くゐりゑけり。

里見八犬傳第三輯巻之四　終